

【若水】わかみづ

・袖ひじて結びし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

[夏に袖を濡らし両手で掬った水が秋を経て冬に凍ってしまったのを 今日立春の風が解かしているだろうか]

立春の今日、冒頭に掲げるべきは『古今集』紀貫之のこの歌しかないでしょう。自然のひとかけらの中に、美、真実を見出すことが得意な日本の詩歌にあって、一首の歌の中に一年の輪廻を展望する視野は稀ではないでしょうか。

立春の宮中年中行事に若水の儀式があります。早朝に主水司[もひとりのつかさ]が儀式のために選定し清め祭っておいた井戸から新しい水を汲み、台盤所の女房を経て、清涼殿朝餉[あさがれい]の間で天皇に奉げる儀式です。一年間の邪気を祓う意味があるそうです。また、このとき使った井戸は儀式の後には廃してしまうようです。(延喜式)

若水の例は時代を経るにつれて宮中年中行事に留まらず広義になっていきます。

『栄花物語』には章子内親王が誕生して初の正月(永延二 988)、「若水をして、御湯殿参る」と若水を用いて赤子の風呂湯にした例があります。邪気を祓う願いが込められていたのでしょうか。この時の若水は立春ではなく元旦の水のことと思われま。

井華水[せいくわすい]については皆様よくご存知のことと思います。まだ夜が明けきらぬ時刻に井戸から汲んだ水のこと、茶の湯の正式な水の汲み方です。夕方から夜半までの水は陰の気で精気がない。鳥の渡らぬ暁の水は陽の気の始まりで最も精気があり、この時刻に茶の湯の水を汲んだのです。(南方録)

茶家では、元旦に家長自らが井華水を汲む儀式があり、この水を特に若水といいます。大福茶(拙稿 8 埋火 参照)の湯となるのです。茶家に限らず元旦に家長、あるいは年男が朝一番の水を汲む習わしのある地域もあるそうです。

村田珠光の弟子、松本珠報は夜ごと茶の水を汲みに出かけていましたが、ある日、夜が明け始め人に見られ、桶を投げ出しあわてて逃げ帰ったという話があります。(源流茶話)

彼が逃げたのは、貧相な姿を見られたくなかったから、あるいは秘密の名水を人に知られたくなかったからという解説を読んだことがあります。はたしてそうなのでしょうか。

茶の湯の水汲みは井華水、すなわち未明からの仕事であるはずを、明けて水を汲む姿は茶人の恥であったためと私は理解しています。

また、狂言『清水』は、主人に茶会の為の水汲みを命じられた太郎冠者がこれを嫌がり、道中鬼が出たと嘘をつき帰ってくる話です。

奉公人が水汲みを嫌がる余地はありません。この話も茶の湯の水汲みというところに意味がありそうです。茶の湯の水は井華水が原則のため、深夜からの苦労であったことがこの狂言の背景にあるのではないのでしょうか。